

# 「居場所」のない若者たち

## ～湘南つばさの家の挑戦～

社会福祉法人白十字会林間学校 自立援助ホーム湘南つばさの家ホーム長 前川 礼彦

### ◆児童虐待対応件数

現在、日本は急速に少子高齢化社会で、1 年間に 50～60 万人の人口が減っていますが、全国の児童相談所に寄せられる児童虐待相談件数は右上がりになっています。令和 4 年度の件数のデータでは、既に 21 万 9170 件で、令和 3 年においても 10 年前の 3 倍強です。国はいろいろな手だてを考えているのですが、なかなか虐待死のニュース等が後を絶たない状況となります。

### ◆児童養護施設とは

児童養護施設はさまざまな建物の形態がありますが、全国に 610 カ所あり、大体 2 歳から 18 歳までの家庭で生活できない子どもたちを保護して、家庭に代わって養育し自立を支援してく場です。湘南つばさの家の後ろ盾になっていただいている白十字会林間学校の養護施設は茅ヶ崎にあり、マンションみたいな造りになっています。定員は 50 名で 6 名から 8 名ぐらい利用できる台所やお風呂、居間などが複数この建物の中にあります。少ないと 30 名定員の施設があったりもします。近年では家庭的な住環境を整えた一軒家タイプの小規模施設も増えています。

### ◆児童養護施設入所児童の状況

その児童養護施設にいる子どもたちがどんな状況かという、親から暴力を受けたり、先ほどの心理的虐待、「おまえなんか死んじゃえ」「産むんじゃなかった」と言われたり、風邪をひいても面倒を見てもらえない、ご飯もろくに食べさせてもらえないなど、虐待体験を受けてる子どもたちがほとんどだろうといわれています。

近年、小さい子たちは里親さんに委託されていくので、年齢の少し高い子たちが児童養護施設に行く傾向があります。平均入所期間が 5 年と言われているが、自立までずっといなければいけない子たちも 5 割以上いるという状況です。小さい頃に虐待等を受けていくと、心身の発達に影響を及ぼしてることがあって、知的に障害が出てしまったり、発達障害と診断を受けたりする子どもたちも 36.7%というデータがある状況です。

### ◆自立援助ホームとは

こうした子どもたちの 18 歳になった後のサポートとして自立援助ホームがありますが、1958 年ころからボランティアな活動で行われてきた経緯があります。当時の児童養護施設は 15 歳で社会に出なければなり

ませんでした。中卒は金の卵といわれた時代です。親に頼れず社会に出なければいけない青年たちが住み込みで働きますが、うまくいかない青年たちもいます。若くしてホームレスになった青年たちを何とかしようということでできたのが自立援助ホームです。その後、関係者たちが声をあげ、制度がだんだんと後追いしてきたという状況です。

現在、自立援助ホームは基本的には中学卒業後、働きながら自立を目指す 15 歳から 20 歳未満の青年たちが対象です。でも、児童相談所の存在を知らず、家の中で親に暴力を振るわれながら、場合によっては 18 歳、19 歳まで耐え忍んで生きている子どもたちがまだこの社会にはたくさんいます。この青年たちが 20 歳過ぎて、やっと社会に出ることができて何もサポートする制度がないというケースもあります。また児童養護施設等も頼れず、そのまま自立援助ホームに来るという子たちもいます。自立援助ホームは私がつばさの家を作った頃はわずか 25 カ所ぐらいしかなかったのですが、現在 280 カ所あり、月ごとに数が増えるぐらい増えております。神奈川県内は 17 カ所になりました。

### ◆自立援助ホームの機能

自立援助ホームは基本的には一軒家の建物です。学校に行ってたとしても、その後、自活していかなければいけないので、就労自立を目指す生活をします。基本的には働いて、自活するためにお金を貯蓄しています。さらに、働くだけでなく、家庭的な暮らしを体験してもらったり、生きていく中での豊かな経験をするなど、いろいろな提供をしています。

つばさの家は私と妻が住み込みでやっていて、スタッフが複数名いるという形です。入居期間は大体、つばさの家で例えると、2 年ぐらいです。

### ◆自立援助ホーム入居者の状況

自立援助ホーム入居者は平均すると 17 歳、18 歳ぐらいですが、先ほどの児童養護施設と比べてみると、被虐待体験が高く心に深い傷を負っています。PTSD（心的外傷後ストレス障害）などから対人関係が不得手で、職場の中での人間関係がうまくいかないと、ちょっと言われるだけですぐ切れてしまうなどにより就労が続かないことが多くあります。

彼らは「本当は働きたくなんかないんだ」「本当は親元で暮らしたかったけど、親元で暮らせないから、働いて生きてくしかないんだ」と言います。「なんで僕は

親元で暮らせなかったのだろう」「なんで親は僕を拒否したのだろう」「なんで親は僕に生まれてくるんじゃなかったと言ったのだろう」といった思いを抱きながら、働くことをしなくてはなりません。まだ10代後半なのに、背負ってるものが非常に大きいということです。

なお近年、児童養護施設で高い年齢の子たちを受け入れるのが難しくなっていることもあり、自立援助ホームに流れるようになってきたのですが、精神疾患や発達障害の青年たちが昔に比べて発見されやすくなりました。

#### ◆自立援助ホームが大切にしている事

自立援助ホームには、自らの意思で入居するという入居申込み制が基本になっています。自分の人生は自分で決める、自分が主役だよという話をよく彼らにします。とにかく丁寧な生活を自立援助ホームでは大事にしています。単に働くための生活を援助するのではなく、一人ひとりが、ほっとできる安心した暮らしを提供しています。「おかえり」とか「いってらっしゃい」の言葉すら家庭で交わされてこなかった子たちに声をかける、食卓をなるべく、みんなでそろって食べることをしています。

彼らの心の中には「自分なんか生まれてくるべきじゃなかった」といった、親に言われたメッセージが色濃く残っています。でも、親ではないけれど、社会の中でこの人なら分かってくれるという安心、「心の港、安全基地」があることが大事です。皆さんもこの人がいたから私は救われた、心の支えとなり何とかやってこれたという方がいるのではないかと思います。そうした存在が彼らにも提供されてしかるべきだと思っています。

#### ◆ステップハウスの実践

制度はぶつ切りの部分が随分ありますけれど、家庭に卒業がないように、人が生きてく上では、継続して関わっていくことが大事です。つばさの家では17年前に入ってきた子も関わっている状況です。近くに一般の賃貸アパートを借りて、そこで一人暮らしの練習をします。つばさの家にご飯を食べに来たり、金銭管理をサポートするような関係を続ける「ステップハウス」の実践を20年間ぐらいしてきました。やっと2021年に国のほうで社会生活以降支援が制度化されました。退居者のOBたちが安心してご飯を食べに来ていいホームは、心の実家ということになります。彼らが戻って来られる場所を保証していくということです。

自立は社会に出てからが本番です。退居後支援が重要です。待つのではなくこちらから働き掛けて、あなたの事を忘れてないよというメッセージをずっと投げ掛けていくことが大事だと思っています。10代で人生が終わるわけではありません。20代、30代、40代、50代と人生の節目やピンチの時に、誰がそこにいる、「繋がり続けること」が代え難い財産ということです。

#### ◆退居後支援～ある青年との出会い～

今から30年近く前ですが、ある乳児院児童養護施設でうまくいかなくなった15歳の子が、自立援助ホームに来ました。ホームにいたのは半年ぐらいですがその後、彼の激動の人生にずっと関わっていきます。ホームを5回ぐらい再入居するのですが、この子は関わってく中で、お母さんの顔を見たことがない、「いつか、お母さんの顔を見たいんだ」とずっと言っていた子でした。仕事を40回近く変わるのですがその都度住み込みを変えるため居場所を失っていきます。私はとにかく住み込みの連続をサポートしていったのですが、だんだんうまくいかなくなって、精神疾患を発症して薬物に手を出すなどさまざまなことがあって、最終的に精神病院に行きます。閉鎖病棟で強い薬を打たれて顔が能面ようになって、よだれを垂らすぐらいまでになりました。その青年が退院した後、行き場がないということで、再度、自立援助ホームに来ます。生活保護を付けて、とにかく地域の中で見ていこうということをした矢先、私の目の前で飛び降り自殺を図ります。なんとか一命を取りとめたときに、偶然にもお母さんが見つかります。そうしたらこの子はみるみる生氣を取り戻して、顔つきが戻ってきました。その後、お母さんと、再婚した旦那さんと共に暮らしていくこととなりました。

しかし関わった子たちのなかには、一生懸命生きようとしたのですが、亡くなってしまふこともありました。そうしたとき、こちらが壁にぶつかります。無力感に苛まされるわけです。自立援助っていうけど自立って何だと、援助って何だとつぶされるような思いになりました。そうして悶々と暮らす数年を過ごして、私は全国の自立援助ホームを見て回ろうということを目指しました。

#### ◆自立援助とは「生きる意欲を育む」こと

当時あった全国24カ所のホームをすべて見て回ります。そのなかで、今は閉鎖しましたが、京都にあった東樹というホームに出逢います。ここで食べること食卓の大事さ、暮らす場、そして最も大事なのは人であることを教えてくれるのです。入居だけではなく、制度外のことを自主的に取り組み、通所したり、通所もできない子には親のカウンセリングで親が来たりと、どんどん展開していきます。児童相談所だけでなく市役所、区役所の福祉事務所を回って、生活保護の青年たちを見たりもしていました。ここの実践が22歳の制度の延長につながっています。ここのホーム長は「制度は後から付いてくる」とおっしゃっていましたが、必要なものは、とにかく民間から発信をしていくのだということです。小さい活動かもしれないけど、それがどんどんと輪のように大きくなっていくのです。彼は「福祉とは、存在である」と言われていました。人の存在が大事であって制度ではないのだと。私が全国ホームを見たときに共通していたことは、生きることへのアプローチ、自立援助とは「生きる意欲を育む」ことでした。

#### ◆決断 ~ホーム開設へ~

こうして人に会い、息吹を取り戻していくなかで、自分が目指すホームを作ろうと考えました。甘えがよくないと思い前のホームを辞めて、絶対に作るのだと本気になれば引き寄せられる縁と機会が得られると信じ、本当に作ることができました。とにかく自立援助ホームを作りたいんですと話して回ったら、いろんな人たちが応援をしてくれました。

それから17年たちました。合計45人の青年たちと暮らしをしてきたのですが、様々な出来事がありました。最初に入ってきた1人目の子は最終的に少年院に行くのですが、少年院の教官の先生にも「この子は少年院の中でも問題児です」と言われるぐらい、すごい大変な子でした。われわれを精神的に追い詰めることがすごく上手だったりする子がいたり、火をつけてホームを燃やそうとした子、壁一面がなくなるぐらいに大暴れをして、警察が16人総動員して住宅街にたくさん集まるような事件もありました。

そうしたとき、武者小路実篤の「この道より、我を生かず道なし。この道を行く」という言葉がビビッと心の中に響いて、親元を頼れないで心細く生きてる青年たちの味方はどこにいるのだと。彼らは好き好んで、その家に生まれたわけじゃない。困難な状況の中で、家庭の中で可能性も狭まられて生きていかなければいけない。そういう青年たちを応援する大人は、どこにいるのだと思い、私は自分が生まれてきた自分の存在意義として、いかに生きるかという哲学を、自分の中に問い掛けながら、自立援助ホームにいる子どもたち、青年たちと、人生を共に歩もうということにしました。

#### ◆困難を抱える青年達に必要なこと

亡くなってしまった青年たちを見て、生きる意欲って何だろうと考えます。心の中から湧き上がるエネルギーをどう育ててくか。生まれて来なければ良かったという思いから、生きていてもいいかも、楽しいかもしれない、よし生きていこうという感覚に芽生えるような環境をどうつくれるのか。それは安定を育む生活の場であったり、受け止められた体験、そして、職場の中に居場所がある、就労の喜び、自分の力で稼ぎ好きなものを買えるとか、さまざまな体験を通して、大人の背中を見せていくことです。そういう中で、よしやってこうと思えたらしめたものです。

#### ◆地域にこれから必要なこと

彼らには、住まいも仕事もお金もない、そして相談する人もいないところからのスタートです。安定した住まいの確保を維持していくことや、理解のある職場で職場体験をさせていただいたり、緊急的な貸付や給付など、素晴らしい積極的な取り組みが地域の中にあります。そのうえで、一番不足しているのは人生を寄り添っていき人の存在、いくつになってもやり直しができる社会です、要保護児童対策協議会が地域にありますけれど、そこでは15歳以上の相談はなかなか上がってき

ません。しかし、埋もれてしまっているケースがたくさんあるということです。そういう意味でも地域に自立援助ホームのような機能が必要だと思っています。

#### ◆新たな取り組み

本当に細々なのですが、これまで少しずつ支援者の方がくださった寄付金等々を貯めてきたお金を全部使ってつばさの家の隣の土地を確保しました。また地域のSOSに対して、何か少しでも貢献できないかということで、市役所や地域の関係機関から受け入れをしています。20歳の誕生日を超えたら制度が切れてやり直しの場所がないのはナンセンスだということで、青年期版の自立援助ホームを1人2人からでもできたらいいかなと思っています。制度もお金もないのですが、一歩進まないといけないということで、つばさの家の20周年あたりにできたらいいなと考えています。

#### ◆新しいものを生み出すために我々に何ができるか

何か新しいことを生み出すときに、もしくは、何かを行動するとき、私はいつも次の言葉を心に問い掛けています。「私は何の為に生まれてきたか」「私は人生で何を成し遂げてきたか」「私は他者や社会に何を貢献してきたか」「私はこの人生でやり残したことがあるか」「私の生きた証をどう残していくか」。そういう「想いを人と人との繋がりの中で、未来へ希望を託すこと」。私たちは100年後に生きていないわけです。でも、想いを人と人に繋いで未来に託しておくこと、その想いをカタチにするために、われわれができる行動は何かということ、皆さんと共有したいと思っています。

#### ◆自立とは

自立援助ホームといいますが、ここでいう自立とは何でも一人でできる事ではないと思います。「適度に人を頼りながら、自らの人生を主体的に生きていくこと」です。頼り過ぎても頼らなくてもよくないのですが、人は適度に人を頼りながらでないと生きていけないのです。「よし！生きていこう」と自らの人生を主体的に生きてくこと。仕方なく生きてるというよりせつかくの限られた人生の中で、自分が行う役割は何かということ問いながら、主体的に生きていくことが大切です。青年たちにも伝えるところであります。

心に誰かの存在が生きていること。そして失敗を保障してその経験から学ぶこと。人は身をもって行わないと分からないことがあります。それを大事にしていこうということです。ありのままの存在を受け止めることは難しいですが、ただ存在を受け止めながら、細くても長くつながってく関係をつくってくことです。「よし！生きていこうという」「生きる意欲を育むこと」を大事にしております。

(まえかわ あやひこ)